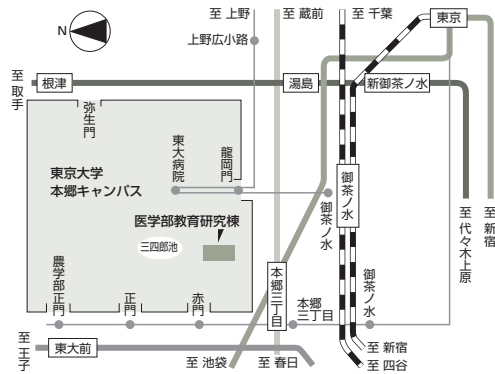


生命 ——バイオスとゾーエー



駅(地下鉄)から会場(医学部教育研究棟入口)までの所要時間
 ◎東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」より徒歩10分
 ◎東京メトロ南北線「東大前」より徒歩15分

河合文化教育研究所

シンポジウム本部事務局

〒464-8610 名古屋市千種区今池二丁目1番10号

河合塾千種校内

TEL 052-735-1706 (朝・昼 9:00-18:00)

FAX 052-735-4032

東京分室

TEL 03-6811-5517 (朝・昼 10:00-18:00)

FAX 03-5958-1241

お問い合わせ先

多くの人間を含む生物が、日々を生き、誕生し、死んでいく。そのありようを叙述しようとする歴史は古く、生物体としてのメカニズムを解明しようとする歴史は、それよりは浅いが、その両者がともに今後綿々と続くであろう。さらに、今日生体を加工する技術(その一部は明らかに医療に貢献している)、生体のありようを日常的に管理しようとする圧力(いわゆるアークの言う「生政治」)が、発展もし、批判もされる。

ところで、生命体としての人間のありようは、ある視点をとって見たとき、我々が持つ日常的枠組みの、短い間に現れているということはないだろうか。

可能なものと生命の間隙：たとえば、人間は、そのときに可能なものの中から一つを選んで行為するという枠組みを持つ。この選択は、行為が実際にされるまでの、ある長さを持った時間になされる。しかし、この枠組みが完全に人間の生命活動を決めはしない。この枠組みにはふたつの未知の部分がある。まず、われわれにどこまでのどのような選択肢が現れるのか。さらに、実際の出来事はこの選択の枠組みをどこかで逃れる。つまり、人間の活動は、そのときには既在となっている可能なものを超えてそれが届かぬところにまで至るからこそ、その活動は生命的出来事となる。選択の前後に侵入し、姿を覗かせ、理性的選択の枠組みを必然的に超える生命。

生命の集団性が顔を覗かせる場面について：それは整列行進が続くときではない。指揮者フルツェングラーは、テンポ・ルバート(音楽が一定の拍の軛から自由になる間のこと)について、次のように述べている。「リズムの自由が生まれるつかの間の時には、必ずそれが“本物”かどうか暴かれるものです。——中略——ルバートが作品の意味するところによって行われず“他所”から出てきたものである場合、つまり人工的なものであった場合には、必ず誇張されたものになります。」

ここには、人間の生の集団性にかかわるいくつかの要素が詰まっている。「つかの間の時」と呼ばれるある短い時間。テンポが自由になり、手綱が放たれるにもかかわらず、大勢の楽員が「一斉に」ルバートにはいっていくという集団性。そしてそれが人工的にならないために必要な真正の場。ここではその場は「作品の意味するところ」と書かれているけれども、それは、作品と楽員と聴衆を一挙に包む場であると考えてよいだろう。

生が限界を越えて破壊され尽くされること：アガンベンの著書によってその姿を戦慄とともに広く知られることになった、アウシュビッツで「回教徒」と呼ばれた人々。彼らは、「あらゆる尊厳を捨て」、「仲間から見捨てられよろよろ歩く死体——身体的機能の最後の痙攣」であったと言う。アウシュビッツが無比の事態であったとしても、現代の延命治療が自然の病苦に手を加えて死にゆく人を「回教徒」化させたことがなかったとはたして言い切れるか。

木村はケレーニイに依拠し、個体化される前の大文字の〈生〉でもあり〈死〉でもあるものを「ゾーエー」、そこから個体化されそこへ帰るものを「バイオス」と呼んで、「生命論的差異」を構想した。この大きな構想の懐の内で、また傍らで、我々は小さな瞬間、切れ目から、様々な生命と死を論じることができるのではないだろうか。(津田 均)

日時
2014年12月14日(日) 11:00-18:00

会場
東京大学鉄門記念講堂

〒113-0033 東京都文京区本郷七丁目3番1号 医学部教育研究棟14F

《参加費1000円(資料代含む)／学生無料》